巻頭言

研究と人間関係*

佐谷戸安好**

略歴

昭和23年 東京大学医学部薬学科選科卒業

23年～28年 東京大学医学部薬学科研究生

28年 茨城県衛生部

37年 茨城県衛生研究所

43年 国立衛生試験所環境衛生部

59年 摂南大学薬学部教授

水質汚濁の研究には化学、物理、生物、水産、工学、医学、薬学など自然科学の広い分野の専門家による学際協力が必要なことは異論はあるまい。しかし学際協力の場合には特にお互いの専門的知識の他に、人間的信頼関係が必要である。研究協力はその進め方によっては、予想だにしない問題が発生し、その成果に傷をつけることすらあるからである。学際領域の共同研究は、他の分野の優れた知人や友人を得ることができると同時に、自己の専門分野の研究の幅を広げられる利点も多い。

私の経験では、水質問題の共同研究に、トリハロメタン問題が成功した例としてあげることができる。1974年、Dr. Harris によって Consumer Report に警鐘が鳴らされた水道水中のトリハロメタンは、EPA の調査から、ニューオルリンズ市水道だけでなく全米のあらゆる水源を原水とする水道の汚染問題となって発展した。私共もこの情報を入手すると、これを研究する必要性を感じ、研究の準備を始めた。昭和49年10月、公衆衛生院の南部先生（故人、当時衛生工学科長）から電話があり、お互いの入手した情報を交換し合った後、できるだけ早く予算を獲得し、共同研究を開始することとなった。薬学、衛生工学、理学、水道局などの専門家によって“水道における有機塩素化合物の指標に関する研究”が開始され、現在標準分析法となっているヘッドスペース法を確立した。ついで医学、薬学、理学などの専門家と“低沸点有機塩素化合物の生体影響に関する研究”が開始され、同時に“公共用水域における有機塩素化合物の発生メカニズムとその除去に関する研究”が進められた。これらの研究の成果は、その後の情報も含めて編集され、“水道とトリハロメタン”（丹保憲仁編、技報堂）を出版した。これらの一連の研究において、米国立癌研究所からトリハロメタンの1つであるクロロホルムの発癌性が動物実験によって確認されたため、その取り扱いについては慎重に対処した。共同研究者の相互の理解と協力が、わが

国のトリハロメタン問題を混乱させず、解決に至らせたのである。この研究を通じて、私は信頼し尊敬できる研究者の友人を得ることができた。

このような学際協力には、自分が専門家として育ってきた過程も重要である。私は大学で衛生化学（薬学）を専攻した。秋谷七郎教授から衛生化学の入門と理念を、浮田忠之進教授からは、研究の方法論とその発展について徹底的な御指導を受けた（両先生とも故人）。浮田教授は御専門の生化学の研究の他に環境汚染問題についても強い関心を持たれ、今日、衛生化学分野で活躍している多くの研究者を育成されたが、昭和47年4月、惜しくも他界された。

私は昭和43年、秋谷・浮田両先生のおすすめで国立衛生試験所に移った。当時所長であられた石館守三先生（本誌9月号、巻頭言参照）から水道水の安全性について研究するよう御指示を受けた。これが私の水質成分の環境毒性学的研究に足を踏み入れる端緒となった。先生はがん研究の分野でも多くの成果を挙げられてきたが、昭和47年、厚生省がん特別研究の中に「環境における化学的発がん因子の研究」を開始することとなり、私にも参加するようすすめられた。それから13年、私は環境発がん因子としての金属や有機ハロゲン化合物について研究を進めることができた。先生は卓越した計画性と指導力によって、環境発がん因子の解明に成果を挙げられた。一方、先生は敬虔なクリスチャンであり、他の人への人間味豊かな思いやりには教えられることばかりである。83歳の御高齢にもかかわらず、摂南大学薬学部へ赴任することになった私のために一泊送別の宴を設けて下さった。そしてその日の朝、筆を走らせたという次のような色紙をいただいた。

為 佐谷戸安好君

真実を探究し、神と人にと仕えん 守三

私は良き師にめぐまれて研究生生活を続けてきたが、これら優れた師の考えをどのように後輩に伝えるべきかを今一度、深く考え直してみたい。

* Some Comments on Human Relation, 昭和59年8月31日受理

** Yasuyoshi Sayato, 摂南大学教授, 本研究協会理事